

2014年度漢文夏期集中コース報告

大竹弘子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、本年度、40週間の年間コースとは独立して3週間の漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置し、2014年6月20日（金）より7月10日（木）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択C」として週1回100分の授業を実施している。しかし、年間プログラムに参加は出来ないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造・読解に集中したコースを設けている。

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に一次資料として漢文を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000字以上の読み書きを既に習得していること

3 受講生の構成

今年度は博士課程に在籍する五名の大学院生、博士号取得者一名、大学教員一名の計七名が受講した。専門分野は近代文学、平安文学、人類学、政治史で、研究において、漢文あるいは漢文調で書かれた一次資料の読解・理解を必要としている。研究対象、及び、読むべき一次資料はある程度固まっているが、漢文の知識に関しては既習の受講生、全く知識のない受講生が混在していた。

4 教育活動の詳細

4-1 授業・校外学習

毎日の時間割は、50分授業が4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から3時20分に行なった。

午前の2コマは第一・第二週の間、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。練習文は知識の程度に合わせ、①返り点、送りかなを付したもの、②返り点のみ付したもの、③白文、の三つの形で提示した。

午後はまとまった文章の読解が中心で、第一週目は近代の文章を取り上げ、漢文訓読体、旧漢字に慣れることを目指した。二週目は、『日本外史』『論語』などからまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送りかなを付けた形で、文脈のある文章の読解を行った。

第三週午前は主に候文を取り上げ、実際の文章の読解に取り組んだ。午後は学生それぞれの研究資料を取り上げて、一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、東海散士『佳人之奇遇』、小川洋二郎『日本新聞歴史序』、『筒粥神事』、正直正太夫（斎藤緑雨）『文筆界の破廉恥漢』、中江兆民『民約訳解緒言』、林元良家文書『五人組掟書』、菅原道真『書齋記』の七点である。

金曜日午後は校外学習として、鎌倉円覚寺での座禅研修、国立劇場での歌舞伎鑑賞教室に参加した。

4-2 授業の実例

ここでは、より具体的なクラス活動について述べる。

午前の構造中心のクラスでは、まずその日の学習項目である構文を、典型的な例文を用いながら説明する。次に用意した短い例文（大体15から25文）を練習文として提示する。受講生は各自自分で例文を読み解いてみる。例文にはその日の学習項目だけでなく、既習の構文、漢字のやや例外的な読み・用法（標準的な漢字辞典には含まれているもの）、語彙・表現的な要素、慣用的な語法などを含めている。受講生は練習文を既習の構文構造をもとに解析し、辞書を引きながら意味を取っていく。分からない漢字、語彙、表現についてはもちろん辞書を引くのだが、自分が既に知っている漢字でも、現代語の読み・語彙・意味ではなく、いわゆる漢文訓読体で用いられる、読み・語彙・意味を適切に選ぶよう指導する。また、この過程で、辞書にどのような情報があるか、どんな種類の辞書、データベースがあるかなど、実際に資料を読み解く上で必要になるであろう「調べる手段」についても知識を得る。また、短い文ではあるが、文脈からの意味判断、話題の背景からの推測などを通じて、文の要素の意味関係を推測していくという練習にもなっている。

午後はよりまとまった量の文章を取り上げて読み、意味を取るという作業を行う。著者、題名、歴史的背景などの情報を得てから実際に読み進めるが、まず、構文知識などを応用しながら、文章をまとまった意味の固まりに分節化していき、どの漢字が語彙としてのまとまりを構成しているかを判断する。次に辞書を引き、その中から適切な情報を選択する。そしてその情報を意味が取れるよう繋げていき、文脈にあった意味関係を作り解釈する。この過程の中の全ての段階で、受講生同士の意見交換、また教師と受講生間の意見交換が行われ、何を手がかりにし、どのように調べていけば妥当な解釈にたどり着けるかを模索する。このような作業を繰り返すことによって、実際の資料を読み進める時に必要な技能の習得を目指している。

5 おわりに

今年度は受講生が七名となり、受講生間に漢文・漢字知識においてかなりの差が見られた。そのため、特に漢文構造を扱う時間では、各受講生の知識に応じて、練習の難度に配慮する必要が生じた。上に述べたように、練習文の提示法を変えるという手段を取ったが、おおむね機能していたと考えられる。

コース終了後実施したアンケートから課題として、次の点が浮かんできた。

まず、このコースが扱う「漢文」というものにはどのような文章が含まれるかに関する情報をきちんと伝えておくこと。特に「漢文訓読体」に関し、純粋な「漢文」ではないが漢文読解のため、文のスタイルを学ぶとともに、「調べ方」の訓練を目的としていることを伝えること。

次に、辞書等の活用法をよりシステムティックに指導できないかという点が挙げられる。辞書にどのような情報がどのような順番で含まれているか、いくつかの辞書、検索法等を横断的に用いて調べることなど、個々の場合に応じて指導はしているが、まとまった形での提示ができないかどうか考慮したい。

また、アンケートでは、受講生それぞれが、これから漢文資料に取り組む意欲を示しており、その点でこのコースを設置した目標は達せられているのではないかと考えている。

(おおたけ ひろこ／2014年度漢文夏期集中コース主任)